

新刊 紹介

病原体とヒトのバトル

山田 毅（長崎大学名誉教授）著

発行：医歯薬出版 / 販売：〒113 - 612 東京都文京区本駒込 1 - 7 - 10

TEL 03 5395 7630 / 本文 236 頁 / 価格 2800 円（税別） / 2005 年 6 月 1 日発行

抗生物質が効かない多剤耐性菌の蔓延や、グローバル化による外来性感染症の危機がメディアに数多く取り上げられ、病原微生物に関する一般市民の関心が高まっています。本書は大阪大学微生物病研究所や長崎大学歯学部で、薬剤耐性機構の解明や、結核菌に対する感染予防に関する基礎的研究で、優れた業績を挙げた著者による病原微生物学の解説書です。医学、歯学、薬学系の学生向けに書き始めた「あとがき」に書かれていますが、微生物学の知識が少ない一般読者にも、また、逆に専門家を称する人たちにも、面白く、役に立つ読み物になっています。

本書は以下の 3 編に分かれています。

- I “暗殺者”としての病原体
- II 病原体が起こす非感染性の病気
- III ヒトと病原体の“軍拡競争”

本書の第一の特徴は癌、動脈硬化、自己免疫疾患などの生活習慣病にも、感染症が発症の黒幕として控えていることを具体的な事例を挙げられながら、紹介しているところにあります。それ故に、第 2 編が中心になるといえるかもしれません。全体を通じて、著者の深い学識が窺われます。従来の病原微生物学の解説書が、ともすれば感染症の羅列に終始していたことと本書は対照的です。全体のページ数の三分の一が第 2 編に割かれています。

紹介の順序が逆になりましたが、第 1 編では病原微生物による感染とヒトの側の戦いが、独自の視点から解説されています。特に若き日の著者が研究テーマにしていた薬剤耐性機構の解説に力点が置かれています。如何にヒトが知恵を絞って次々と新しい抗菌薬を開発しても、細菌の方はやすやすと耐性菌に変身して新型抗菌薬を無力化してしまうかを、具体例を挙げて説明しています。単純に力（薬剤）で病原菌に対決することは有害無益であることを思い知らされます。

第 3 編では著者の思想が纏めて紹介されています。この編については、読者によって、著者の意見に反発を感じる人もいると思います。私個人も「微生物を敵視するのではなく、共存の道を歩まなければならない」とする著者の意見にはまったく賛成ですが、「ヒトは、病原体に対しても、自然に対しても、多様性を獲得する方向に進化している」とされている山田氏の意見には少々疑念を持っています。

病原体とヒトとのバトルを進化論的視点から考察ながら、「人類は自然と共生するしか生き残る道はない」というのが本書の結論です。本文のところどころに、例えば「先進国でも、財力のある者は、隠れて複数の配偶者資源を獲得し、隠し子を作るケースが、どこかの国の政治家にもよく見られる」という皮肉が書かれており、思わず笑ってしまいます。少しでも多くの本誌の読者の方々に読んでいただきたいと思える本です。

(医薬品副作用被害救済・研究振興調査機構 三瀬勝利)